

「消化管器械吻合」

秋山 洋 虎の門病院部長
中山 隆市 平塚市民病院院長 編集

鹿児島大学教授・第1外科

西 満 正

最近、器械吻合器が積極的に消化管吻合に用いられるようになってきている。私も食道空腸吻合術、食道離断術、直腸前方切除術などに器械吻合を利用している。1981年に鹿児島で手術手技研究会を主催した際には、主題として器械吻合を取り上げて、種々の問題点について討議を行った。最近いろいろな雑誌にも特集が掲載されているが、使用経験豊かな術者らがその使用法などについて詳細にそしてわかりやすく解説し、単行本としてまとめた本は従来なかったように思う。この本はその最初であり、器械吻合についての理論と実際の教科書となるのではないかと思う。

まず、12世紀にさかのぼる器械吻合の歩みの項が実に興味深い。そして、1958年峰式吻合器のこと、1972年中山隆市式吻合器のことなどを含めて歴史が実によくわかる。私は今後このようなソフトウェアの部門では、日本が世界をリードしてほ

しいし、するであろうと信じている。

使用にあたっては、その歴史と吻合の理論、治癒過程なども知ることが必要であり、またそれぞれの器械の特徴、使用上のコツ、適応、留意点、利点、欠点などを知っていなければならない。このような点について多くの図を用い、きめ細かな解説を行っている。本書では器械吻合の手技とコツばかりでなく、吻合部の創傷治癒の病態に関する基礎的なことについても多くの紙面をさいており、実際の吻合を行ううえでも、術後管理のうえでも理解がしやすい。

今まで手縫い縫合に慣れているせいで、最初使用するときには、どうしても器械の特性あるいは操作などに不慣れなせいもあり不安がつきまとうものである。しかし、この1冊の本を熟読し、十分な注意を払えば、吻合時間の短縮、出来上がりの均一性などの利点を十分活用することができるであろう。だが、安易さのみ

追求すると重大なミスをおかすこともあり、手縫い縫合と同様な細心の注意が必要なことも著者らは警告している。器械吻合は吻合器の機構を十分に理解し習熟したうえで、通常の縫合を確実に行える技術を持ったものが使用してはじめて確実な器械吻合ができるものであるとし、手縫い縫合が吻合技術の基本であることも強調している。全く同感である。

この1冊の本で多くの方々の器械吻合についての理解が深まり、更に一段と健全な器械吻合法の発展、普及がみられるものと考えられる。とにかく、これだけしっかりしていて親切な消化管の器械吻合に関する本は、世界にないと思う。最後に、安全で、正確で、使いやすくてレパトリーの広い、そして値段の安い、世界一の器械が日本でできることを希望する。

B5判 頁212 図103 写真122
原色図22 1982年 ¥6,000 ㊦350

医学書院 刊